

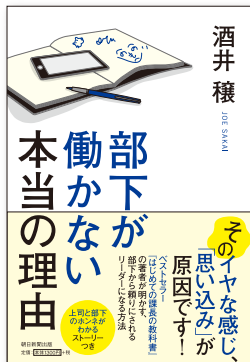
書籍『部下が働かない本当の理由』スピンオフ企画

無料で
読める!

「上司と部下の ホンネがわかるストーリー」

「あいつは本当に働く気があるのか」と嘆く上司・水島課長と、「成長できないのは上司のせいだ」と自覚のない部下・友松。他人のせいにしてばかりだった二人が歩み寄りきっかけになったのは、友松がいただいた「住宅ローン」に対する疑問だった——。水島課長と友松の衝突と成長を主軸に、それぞれが新たな一步を踏み出すまでの過程を描く。不本意だったはずの出会いの先で、水島課長と友松が見いだした答えとは？

ストーリーをより深く理解できる解説&ヒントは、
書籍『部下が働かない本当の理由』で読める!



部下が働かない 本当の理由

酒井 稜 著

定価1,404円(税込)
単行本四六判・並製192ページ
ISBN978-4-02-331286-9

朝日新聞出版
から
2014年5月8日
発売!

全国の各書店でお求めいただけます。

目次

- | | |
|----------------------|--------------------|
| 第1章 誰にでもある「自己奉仕バイアス」 | 第5章 「一貫性の原理」に潜む危険性 |
| 第2章 上司の常識に向けられた部下の疑い | 第6章 リーダーシップの必要性 |
| 第3章 職場を任せられたマネジャーの務め | 第7章 コミュニケーション力の高め方 |
| 第4章 キャリア形成の基礎になるスキル | 第8章 上司と部下の新しい関係 |

ス ストーリー1 あの男

鶴見川にかかる橋の上から投げ捨てた iPhone は、「すん」という音を立てて、川底に消えた。

数カ月前、僕はこの場所から、ピンク色のシーツみたいになった、水面に浮かぶ桜の花びらを見ていた。そのときは、たしかに興奮していたと思う。同期の誰よりも早く昇進してきたことに、喜んでいた。だが、今はどうしても、あのときの気持ちが思い出せない。

昇進祝いをかねた、同期だけを集めた花見を、坂本孝平が企画してくれた。あの日、坂本は花見の終盤で、屋台で買ってきた「あんず飴」でベタベタになった手を僕の肩に回し、「うらましいよな」

と言った。僕はその手を避けようとして、その場にいた同期の女性と頭をぶつけてしまい、他の同期がそれをからかった。酔っていたのだし、しかたがない。でも、その直後に

撮影された僕の写真は、しかたがないというのではなく、あきらかに嬉しそうだつた。

ここに来て、その写真を見れば、数カ月前の自分に戻れるかもしれないと思つた。営業に行つてくるとアシスタントに嘘をついてまでここにいるのは、それを確かめるためだつた。だが、それは幻想だつた。まあ、あたりまえだ。

僕は、あの男の爪をかむクセが許せない。笑うときに口の端を斜めに上げるのも嫌だ。妙にかん高い声も気に食わない。趣味だというスノーボードだつて、どうせ女にチャホヤされたいからやっているのだろう。

そう、あの男は、きつと典型的な「ゆとり世代」の人間なのだ。だから、いつもおかしなことばかり言つて僕の仕事を邪魔するのだろう。あの男さえいなければ、僕はもつとうまくやれる。ここ数カ月の業績の悪さは、すべてあの男のせいに見える。

「だつて、そうじゃないか！」

自分でそう声に出してみたら、あわてて周囲に人がいないことを確認した。誰もいない。ああ、自分はすしおかしくなってしまったのかもしれない。早く立ち直らないと。

人事に相談して、あの男を僕の下から異動させよう。もう、それしかない。いや、人事に相談したら、新卒の部下すらまともに教育できない上司として、大きく減点されてしまうかもしれない。それはまずい。

だがあの男は、昨日ついに、

「ボクが仕事できないのは、どう考えても水島さんが悪いからです」

と言いつつたのだ。他の部下もいるところで、そして、他の部下にも聞こえる声で。

自分がダメな理由が、僕のせいだなんて、さすがにどうかしている。僕はあの男の上司だ。そもそも、上司に対してそんなことが言えるなんて、どういう教育を受けてきたのだろう。できるならもう「ゆとり世代」には関わりたくない。

iPhoneを川に投げてしまったことは、失敗だった。バックアップをとったのは、もうずいぶん前のことになるから、あの幸せそうな自分の写真は、この世界から消えてなくなってしまうことになる。今となっては、あれが、本当に僕の写真だったのかさえ疑わしく感じられた。

今日が木曜日なのも、よくない。このまま自宅に帰って明日の夕方ぐらいいまで寝ていた

い気分だったが、とにかくいったん、会社に戻ることにした。

戻ると決めたら、すこし気が楽になった。あの男は、必ず定時で退社するから、これから会社に戻っても顔を合わせることはない。終電まで仕事をすれば、鶴見川でサボっていた時間も取り返せるだろう。

東横線の綱島駅まで歩いてきて、僕は自分の口の中がゴワツと荒れていることに気がついた。これから冬に向かって、乾燥が強くなる。ずっと歩いてきたので、あまり寒さは感じなかったが、それでも風は冷たい。季節が入れ替わるように、あの男もまた、自分の部署からどこかに出ていってくれないものだろうか。

口を湿らせるため、駅前のコンビニでペットボトルのお茶でも買うことにしよう。そう思って、赤外線センサーを目視しながら、コンビニの自動ドアの前に立った。そのときは、見慣れたスーツ姿が店内にあるのを認め、あの男がコンビニの店内にいることに気がついた。

あの男は、スーツを一着しか持っていないようだった。入社してもう結構な時間が経つというのに、ずっとその一着を着まわしている。着替えないため、上着の背中やズボンの

尻のあたりが摩耗して、ツルツルになってしまっている。あの男は、身だしなみ一つ、きちんとできない奴なのだ。

身だしなみだけではない。せっかくアレンジしてやった新人歓迎会では、いきなり会社の将来が不安だなどと言い出した。そんなふうに出場をしらせさせた上で、先に帰ってしまった。簡単な仕事を依頼すると、そんな仕事には意味がないので、アウトソースを使ってくれという。パーベキューに誘うと、週末に会社の人と会うのは休日出勤だと主張し、休日出勤手当を要求してくる。いざというときのために携帯番号を聞こうとすれば、プライベートの番号だから教えられないそうだ。それでも一度本当に困って、履歴書に書かれていた携帯番号に電話をしたら、その番号はもう使われていないものだった。

そんな状態だから、あの男にやらせる仕事がなくなってしまった。あの男もヒマをもてあましていいのか、ネットでなにやらニュースなどを見て一日過ごしている。このご時世、内定をもらうだけでも大変なはずなのに、あんな態度では、うちの会社で昇進していくことは絶対に無理だ。こっちは心配してやっているのに、あの男はくだらない屁理屈で、その好意を無駄にしている。

「ボクが仕事できないのは、どう考えても水島さんが悪いからです」

そんなわけあるか。どう考えても、こんな状況になっているのは、あの男のせいだ。とにかく、自分の正しさばかり主張して、自分の世界を守ろうとしている。部署の業績に問題があるのに、それを自分のこととして考えることができない。部下としては、とても使えない。だいたい、人事はなんでこんな人材を採用したのだろう。完全に、どうかしている。

僕は、このときの無礼な言動にどう対処してよいやらわからなかった。年下の人間に、あんなことを言われたことはなかったので、動揺してしまったのだろう。

とにかく話を聞いてやるからと伝え、会議室を予約するように指示を出した。そして、その指示は当然のように守られなかった。あとで別の部下から、このとき、僕の耳は真っ赤になつていたらと聞いた。そういう細やかなところに気がつけるようになるまで、あの男を教育していけるかどうか、とても自信がない。

ただ「ゆとり世代」というのは、そもそも、こんなものなのかもしれないと思う。こうして、会社を定時で上がり、コンビニで時間をつぶすのが、平均的な「ゆとり世代」なのだろう。若いときは、誰よりも早く会社に来て、誰よりも遅く会社を出るものだ。みんな

なそうしてきたのだ。そんなこともわからないのだから、本当にどうしようもない。

そういえば、あの男は中野で家族と同居していたはずだ。なぜ中野とは会社をはさんで反対方向にある綱島にいるのだろうか。スノーボードで知り合った女のところにも来ているのだろうか。

喉が**む**づく痛みはじめた。コンビニの自動ドアは、その前で立ちつくしている僕をせかすように開閉を繰り返す。小学生のときの、長縄跳びみたいだ。入るタイミングを間違えると、縄に足がひっかかるような不安を感じる。

あの男に社外で会いたいとは思わない。僕は自動ドアの開閉に挑戦することなく、そのコンビニを離れ、まっすぐ綱島駅に向かった。

東横線の中から、あの男の姿は見えなかった。

そのかわり、電車の窓から、傾いた太陽の光を受けてオレンジ色に染まるビルが、風景とともに流れていくのが見えた。なぜか、このとき僕は、もうすこしだけ「ゆとり世代」を観察してみようという気持ちになった。気まぐれなのかもしれない。ただ、中野に住んでいるあの男が、どうして綱島にいたのか。そこから、なにかがわかるような、そんな気がした。

あの男の名を、友松大介という。

ス

トリー2

この会社

「水島さん、日本の世帯数って、知ってますか？」

次の週の月曜日、昼休みの直前に、友松が声をかけてきた。知ってますか、ではなくて、ご存じですか、だろう。言葉がおかしい。このレベルから教育をしなければならないのだから、本当に困ったものだ。

「ゆとり世代」の研修を担当する人事も大変だが、やはりクレームを入れておこう。友松が僕の部下として配属されてから、こうしたクレームを何件入れたかわからない。とはいえ、人事からは、新卒のことはささいなことでも報告をするように言われている。そこはルールだ。

「知らないし、興味もないよ」

まだ昼休みのチャイムは鳴っていないし、他の部下もいる前で、このまま無駄話を続けるわけにはいかなかった。

人事にクレームを入れるため「新規メール」のアイコンをクリックした。僕がいかに苦勞しているのかを、しっかりと人事に伝えておかなければならない。

クレームを聞いてくれる人事がいるということに、すこし嬉しい気分になりながら「件名」に「新卒研修の件」と入力しようとした。しかし入力が日本語モードになっていなかったため、画面には「sinsotukennsyuunokenn」と意味をなさないアルファベットが続く。キーボードまで、言葉の通じない「ゆとり世代」になってしまったようだ。

「5000万世帯です」

なにが言いたいのだろう。僕は入力を日本語モードに変更しつつ、顔を上げた。

興味が無いというだけでは、友松には、その意味が伝わらないのか。昼休みのチャイムは鳴っていないのだから、今はそういう話を、他の同僚もいるところではすべきではない。そういうことがわからないのが「ゆとり世代」の特徴なのだろう。

業務時間中は、私語はできるだけつつしむべきだ。はたして、こういうことまで、研修

でカバーできるものだろうか。人事も大変だ。

「だから？ それになにか意味があるの？」

「じゃあ、日本にはいくつの家があるか、知ってますか？」

「もういいって。本当に興味ないから」

「水島さん、持ち家でしたよね？ 住宅ローンの話、みんなに嬉しそうに話してましたよね？」

これにはカチンときた。住宅ローンが嬉しいのではなくて、自宅を所有できることが嬉しいのだ。

持ち家を選択することには、借家では得られない安心感がある。妻や、妻の両親も喜ぶことが理解できないのだろう。もしかしたら「ゆとり世代」の問題は、国語能力の問題なのかもしれない。

顔をパソコンのスクリーンに戻し、「件名」を「新卒研修の件」から「新卒の国語能力について」に書き換えた。僕のデスクに歩み寄ってきた友松からそれが見えないようにメールの画面を見えなくしながら、僕は自分の耳が赤くならないように心を整えた。それから、できるかぎり落ち着いた声を出そうと、奥歯に意識を集中させた。

他の部下も、気にしていないようなフリをしてはいるが、このやりとりを見ている。僕が、新卒一人使いこなせていないように思われては困る。面倒だが、軽くあしらわないと、僕の管理能力が疑われる。なるほどこれは、自分にとって危険な場面だ。

「ローンが嬉しいわけないだろ。もういいって。本当に。仕事しようよ。な」

「日本には、6000万の家があります。でも世帯数は5000万です。家が1000万も余っています。だから、住宅ローンとか組んじゃダメなんです。売りたくなくても売れないんです。死んじゃいますよ？」

持ち家か借家か、という議論が簡単ではないことは知っている。でも、余っているのは過疎化している地方の物件や、都市部でも古い物件だろう。それに、世帯として数えられ

ていない人々が住む場所もあるはずだから、実際には1000万も余ってはいないはずだ。仮に、本当に1000万も余っているとすると、高い耐震基準で設計され、デザインにも優れている新しい物件は、まだしばらくは売れるだろう。

最悪でも、東京オリンピックまでは大丈夫だろう。それに東京都の人口は、まだ増えている。外国人にも、東京は人気の高い都市だ。そしてなによりも、賃貸の家賃を払うよりも、自分の持ち家のローンを払うほうが気分的にずっとよいことは重要だ。もちろん不安もあるが、それは借家だって同じことだろう。借家で通じた人は、老後にローンを払い終わった家を持っている人のことをうらやましく感じるはずだ。

「リスクはわかってるよ。その上で買ってるんだから、それでいいじゃないか」

友松はすこし黙ってから、珍しく言葉を選んで、こう言った。

「この会社は、自社ビルを持っていませんよね。それは合理的ではないからですよね？ この会社が自社ビルを持つとうとしない本当の理由を、水島さんはご存じなんですか？」

自分でも不思議なのだが、このときは「ご存じなんですか」という友松の言葉がとても気になった。それから、友松が入社以来「この会社」という表現を使っていることにも気がついた。友松は、僕や他の部下みたいに「うちの会社」という言い方をしない。

うちの会社は、たしかに、自社ビルを持っていない。だが僕は、その理由を考えてみたことはなかった。そんなことはどうでもよいことのように思われたし、僕の仕事には関係のないことだ。管理本部だか、総務部だかが考えるべきことであって、それは僕の仕事ではない。だって、そういうものだろう。

「友松くんは、その理由を知っているの？」

「知りません。でも、ネットの力で在宅勤務が増えれば、オフィスはもつと小さくできます。オフィスの賃料がなければ、商品の価格をもつと安くできますよね？ いろいろな意味で、自社ビルは合理的じゃないって、尊敬している人に聞きました。それで、この会社が自社ビルを持ってないとわかって、ちよつと嬉しかったんです」

友松は、うちの会社のことを知ろうとしている。それが、僕の部署の仕事とはなんの関

係もないことであつても、そこから「ゆとり世代」を、ちゃんとした社会人にしてやれるかもしれない。

それと、友松に「尊敬している人」がいるという部分も重要だ。いつか、その人に会つてみれば、友松の問題もすこしは理解できるようになるかもしれない。チャンスかもしれない。

「総務部の奴に、一緒に自社ビルを購入しない理由を聞きに行つてみようか？」

「えつ、本当ですか？ それは嬉しいです！」

入社から数カ月、顔をこれほど明るくした友松を見たのははじめてだった。友松にも、勉強をしたいという気持ちがあることが確認できただけでも収穫だ。ここから、なんとか僕の部署の業務にも、もつと興味を持つてもらえるようにしていきたい。

僕は見えなくしていたメールを開いた。「新卒の国語能力について」となっている件名を、友松にバレないように、すばやく「申し訳ないけど……」と書き換えた。それから総務部にいる同期の名前を思い出そうとしたが、思い出せない。あまり目立たない奴なので、

それもしかたがないことか。その顔を思い出したところで、昼休みのチャイムが鳴った。

「アポ入れておくから、今日は先輩の言うことを聞いて、ちゃんと仕事しておけよ」

「ボクのところに、ちゃんとやる仕事なんてありませんよ。コピーとか、そういうのですから。でも、総務部の人への連絡、お願いしますね」

そう言うと、友松は小走りにエレベーターホールのほうに向かっていった。

まだ、なにもできないくせに。自分がなにもできないということが、自分の足りないスキルと経験のせいであることを認めたくないのだろう。子供だが、しかたがない。

「ゆとり世代」というのは、ある意味で日本の教育システムが生み出した犠牲者なのかもしれない。僕は、なんとか友松をちゃんとした社会人にしてやりたい。いったんはあきらめかけたが、もうすこし頑張ってみよう。

昼食から戻るのが遅れることをアシスタントに伝え、僕は、新しいiPhoneを購入するために街に出た。新しいiPhoneは、笑顔の自分の写真からはじめたい。そう

思つて、購入したばかりの iPhone から、昇進祝いを企画してくれた坂本にメールを送った。「今晚どう？」と、ただそれだけ。月曜日だったので、夜の予定もあいている可能性が高いと考えてのことだ。

同期が与えてくれる安心感は、なにごとにも代えがたい。もしかしたら、友松は、同期とうまくやれていない可能性もあった。それで、あんなふうにも上司に反抗的な態度をとるのかもしれない。いや、友松の同期も「ゆとり世代」のはずだ。坂本のところにも新卒が配属されていたはずだから、その点についても聞きたい。

13時をまわってから、いつもの定食屋に入った。サバの味噌煮が680円で食べられて、明太子も食べ放題である。住宅ローン組の味方だ。人気店なので、普段ならすこし待たされるのだが、昼休みが終わっているこの時間だからだろう、すぐに店内に通された。この時間の店内には「まともな格好」をしている社会人が少ないことに気がついた。そういう連中からすこし距離を置いて、僕は、スーツ姿の社会人が固まって座る一角に自分の席を定め、注文のために店員に声をかけた。いつもなら食べ放題の明太子が入っているボールは空になっていたが、スーツ姿の社会人たちは、それを店員に指摘しなかった。僕も、そういうものだと思う、この昼は明太子を食べなかった。

サバの味噌煮が運ばれてくるころ、まだ初期設定のままの iPhone が「ポローン」と非常識な音量でメールの到着を告げた。僕は iPhone を消音モードにして、坂本に、今晚の店をどこにするか、場所を確認するメールを書きながら、サバの脇腹に箸を入れた。サバ特有の脂と、冷めるほどにスツキリする味わいが嬉しい。サバは、最高にコストパフォーマンスの高い食材だ。焼いてしまうとサバサしがちな身も、味噌煮にすることでしつとりする。シヨウガとの相性も抜群によい。

旬のサバを楽しみながら「秋サバは嫁に食わずな」という言葉を思い出した。姑が嫁をいびってきたことをあらわす嫌な言葉との解釈が多い。でも、本当のところはわからない。これだけおいしくて安い食材を経験してしまうと、なにかを得るときの対価に関する感覚がくるってしまうというあたりに、言わんとするところがあるような気がする。本来、うまいものは高いのだ。優れたものを得るには、小さくない犠牲が必要なのだ。欲しいものは、簡単には得られないのがこの社会の現実なのだ。

そのあたりの理解に「ゆとり世代」の間違いがあるような気がした。

ス

トリー 3

この子たち

坂本から「どこでもいい」という返事があったので、恵比寿にある九州料理を出す店を予約した。ここは僕が個人的によく利用している店で、本格派なのに、価格はチェーンの居酒屋より安い。

住宅ローンを抱えたせいで、安くておいしい店を探す楽しみが増えた。いや、これはすこし強がりかもしれない。カネを出せば、もつとうまい店があることは知っている。ただ、そうした事実も、忘れておくほうがいい。

坂本は、予約していた時間よりもかなり早く着いたようだ。僕は20分ほど遅れてしまったのだが、坂本は先に酒とつまみを注文しており、笑顔で迎えてくれた。

同期とは、実に気楽なものだ。先輩後輩の関係があると、こうはいかない。そもそも先輩後輩の関係が面倒な日本だからこそ、同期が大事なのだろう。

すでに坂本の手握られていたジョッキに、運ばれてきたばかりの僕のジョッキを傾けた。カチンという音にもまた、季節が感じられる。こういう時間が、ずっと続けばいいの

に。

「なにかあったんですか？ 水島課長？」

坂本は、おどけてそんなことを言った。坂本の昇進は、残念だが、遅いほうだ。せつかくの同期なのに、こうした小さな差が生まれてしまうのは、よくないことだと思う。同期はライバルではなくて、友達のようなものであってほしい。

それなのに、僕が課長で、坂本は係長代理にすぎない。変な上下関係ができてしまうのを嫌って、坂本はこうおどけてくれたのだと思う。

「やめろよ、ただの同期だろ？ 俺は運がよかっただけだよ。それに部署の業績がよくないから、いつ降格になるともわからない状況だし」

大切な同期とのせつかくの時間に、あの男の話をしなければならぬと思うと、胸やけがしてきた。喉をロッククライマーのように登ってくるこの胸やけを、僕は冷えたビールで腹の底に押し返す。店に到着してから、僕はまだつまみに手を出していなかった。でも

僕の腹の底には、遅めの昼に食べたサバの味噌煮がある。そのサバに、ビールがしみ込む。

「へー、同期トップの水島課長でも、うまくいかない仕事があるんだね」

水島課長という呼び名は、おどけて言っているのではないのかもしれない。僕との距離をはかろうと、坂本は慎重になっている。敬語を外しつつも、課長という呼び名は残している。社会人としてのトレーニングを受けている坂本としては、同期であっても格上に対しての礼儀を考えているのだろう。早く、同期らしい状態に落ち着きたい。

でも正直、僕が逆の立場であっても、同じように、まずは距離をはかるだろう。できれば、そういう逆の立場にはなりたくないものだが。常に、相手の無礼を許す側にあるほうが、無礼を許される側にあるよりも、気が楽なのは間違いない。

「水島課長はやめろよ。ただの肩書きだよ。なんていうのかな……」

「猿山の猿？」

「そうそう、そんなもんだよ。……猿山で……すこし上の石に腰掛けている奴も、その石を下から見上げる奴も、所詮は猿だろ？」

こう言ってみて「すこし上の石」という表現が正しくなかったと思った。「下から見上げる」という表現も強すぎる。そして、上にいる自分が自分のことを「猿」だというのは謙遜になるが、上にいる自分が下にいる坂本を「猿」だというのはよくない。

こんな無防備な発言をしてしまったのは、坂本が「猿山」なんていう危険な表現を使っていたからでもある。正直、僕は自分のことを「猿山の猿」だなんて思っていない。だから、そこで切り返しに焦り、しくじったのだ。

もしかしたら、腹の底にはもはやサバの味噌煮は残っておらず、なにもない胃の外壁に、ビールが薄い膜をつくっているのかもしれない。坂本は僕のへたくそな切り返しに、どう反応するだろう。この刹那、胃が熱くなるのを感じた。

やはりサバは、僕の胃の中にはもういないようだ。

「実はさ、うちに配属された新卒が、猿山の猿っていう表現が好きなんだよ」

坂本のところにも「ゆとり世代」が配属されていた。その男（その女？）がどんな奴なのかはわからない。それでも、入社して間もない学生みたいなのが、会社組織を「猿山」にたとえている。そこで必死になつて働く僕たちを「猿」と表現している。

生きることは難しい。必死になるのは、格好の悪いことかもしれない。でも、それが社会人としてあたりまえのことだ。自分の人生がかかっている場所を軽蔑しておいて、どうして前向きな仕事ができるだろう。どうにも根本が、曲がつてしまっている。

「ふーん、それもひどい話だね。ゆとり世代つてやつだよな」

「まあでも、猿山の猿つていう考え方もあるかな、と思うようになってきた。もちろん、水島はすごい奴だし、水島が猿だなんて思つてないよ」

明太子の入っただし巻き卵が運ばれてきた。昼に食べ逃した明太子が、だし巻き卵の中心軸になつていて、卵焼きが放つ湯気の向こうに、明太子の赤色が透けて見える。その湯気に向かつて、箸を伸ばした。

伸ばした箸にずつしりとした重量を感じながら、坂本が僕のことを呼び捨てにしてくれ

たことに安堵し、また、すこしのいら立ちを感じた。

いや、むしろいら立っていた。肩書きを外して無礼講で行くには、このタイミグは早すぎる。もうすこし、お互いが酔ってから、僕のほうから、ややしつこく肩書きはやめてくれというお願いがあつてから、それを外すべきところだ。

なるほど、上下関係は、組織に規律をもたらすためには、大切な要素だ。しかし、その上下関係は、社内でしか通用しなとなれば、それを「猿山」と表現するのも、あながち間違っていないのかもしれない。だがそれで、会社として成立し、利益をあげ、社員の生活の糧を生み出しているのが現実だ。人が生きていくとは、そういうことだと思う。他の方法があるなら、教えてもらいたい。

「坂本のところにも、ゆとり問題があるんだね。うちも苦勞しててさ……」

「うーん、新卒の教育は大変だけど、俺はこれを、ゆとり世代の問題みたいには考えてないんだよ」

僕が今日、坂本と話したかった「ゆとり世代」をどうするのかという話は、どうやらで

きそうもない。世間では「ゆとり世代」に関する様々な問題が言われている。これは、一つの社会現象のはずだ。この社会現象に対して、本当に坂本は、世間一般とは異なる意見を持っているのだろうか。

「どうということ？ 新卒がいきなり、自分の会社を軽蔑するようなので、これまでもあったこと？ 本当に、普通のことなのか？」

坂本は、言葉を選んでいるようだった。「猿山の猿」という表現が、僕にとって「会社を軽蔑するような」表現に感じられることが伝わったからだろう。そうなると、最初にこの表現を持ち出した坂本からすれば、話し方を間違ったということになる。

僕は別に、坂本と「猿」の話がしたいのではない。「ゆとり世代」の問題を、一緒に考えてもらいたいと思っている。それから、うちの会社の未来を話したり、すこしだけ愚痴を言ったり、そういう時間を過ごしたい。早く「猿」の話題から離れたい。やはり僕は「猿」じゃないし、坂本だってそうだ。

「俺たちはさ、出世したいじゃない。俺は同期トップで出世してる水島がうらやましい。

でもそれって、会社がずっと続く前提での話だよな」

「うちの会社は、そう簡単につぶれたりはしないだろう」

「それはわからないよ。大企業だって危ない時代だよ。それに会社はつぶれないかもしれないけど、早期退職で追い出されたりとか、個人はそれなりに危険じゃないかな。昔の先輩たちよりも、今の俺たちには、そういう不安が多いように思う」

僕は、同期の中ではそれなりに上にいるので、正直、この点についてあまり不安はない。とはいえ、先輩たちのような巨額の退職金が得られないということは、マンションをかうときにはつきりと認識した。

先輩たちの時代のほうが、今よりも不安が少ないという指摘は、そのとおりのだろう。坂本のように出世が遅い場合は、このままだけぱりストラの対象にもなることを覚悟しないといけないかもしれない。だから、坂本が住宅ローンを組むことは、難しいかもしれない。人生は不公平だ。

「まあ、誰だつて不安はあるけど、それと、ゆとり世代のおかしな態度とは、あまり関係がないんじゃない？」

「水島はさ、もう一度就職活動中の大学生に戻れたとして、それで、うちの会社への入社を希望するかな？ 他の会社じゃなくて、本当にうちに入社するかな？」

胃の中に、明太子と卵焼きがおさまっていた。カツオの刺身に乘せられていた、薄くスライスされた生のニンニクが、唇の端から喉までの範囲をヒリヒリさせている。

僕は、自分が大学生に戻つたとして、もう一度うちの会社に就職するだろうか。自分の子供に、うちの会社に入つてもらいたいと思うだろうか。自分の子供に、うちの会社の同僚と、結婚してもらいたいと思うだろうか。

坂本は、うちの会社では活躍できていない。一時、坂本が転職を考えているという噂が同期の間で話題になった。そのとき、僕はその噂をあまり疑わなかった。その意味では、坂本は、もう一度大学生に戻れたとしたら、うちの会社を選ばないのだろう。

僕は、どうだろう。うちの会社に就職する気がする。でもそれは、今の自分に向けられている会社からの評価と、会社が与えてくれる自分の地位に、それなりに満足しているか

らだ。同期との競争に勝てるのは、ほんの一握りであることを思い出すと、多くの同期は、もう一度チャンスがあったら、うちの会社を選ばないのだろう。

誰もが上のポストを目指すとしても、そこにたどり着けるのは、本当に少数だ。であれば、どこの会社であつても、入社前の自分に戻れたとしたら、今の自分がある会社を選ばないという人のほうが多いのだろう。そういう人々は、新卒が自分たちの会社に入つてくることに勇気づけられると同時に、それをすこし不思議なことに感じるのではないか。自分なら選ばないうちの会社を、どうして「この子たち」は選んで入社してくるのか、と。そう、彼らは、ほとんど自分の子供と同じ世代であり「この子たち」というふうにしか表現できない。

ちょうどそのとき、どこかのテーブルでビールをひっくり返した集団がいた。騒ぎのほうに目を向けると、大学生の集団のようだった。「この子たち」も、仲間と飲みに行つて騒ぎたいと思つている、同じ人間ではあるのだろう。礼儀を知らず、仕事にも不まじめで、出世をのぞまないとも言われる「この子たち」は、やはりどこか間違つていると思う。その間違いが、どこで生まれてしまうのか、僕は、それを知る必要がある。

うちの会社を選ばない、もしくは自分の人生を「ここ」と決めないとは、どういうことだろう。よくわからない。それで、働いていけるものだろうか。それで頑張れるものだろう。

うか。僕たちの世代は、たしかに、上の世代ほどには退職金に恵まれていない。そろそろリストラの不安が現実化してくる年代でもある。

そして「この子たち」は、僕たちよりもさらに厳しい時代を生きることになるだろう。まじめに勉強をして、まじめに働くということの重要性を、「この子たち」こそ、しっかりと認識しないとイケないはずだ。

「もう一度大学生に戻れたら、俺はうちの会社に入るよ」

僕はそう言ってみて、自分の清らかな部分と、濁った部分が、水と油のように分離するのを感じた。濁った部分が、この言葉に反応して、胃の内容物に悪さをする。まだ、たいした量は飲んでいないのに。

黒い石でできた、トイレの冷たい床に両手をついたものの、吐くことはなかった。それほど、弱くない。もつと厭しいことに耐えてきている。

管理職のポジションは、いわば打席だ。これまでずっと補欠として耐えてきて、やっとレギュラーとして打席に立てたわけだ。これは、貴重なチャンスだ。このチャンスをつかめなければ、僕は油の底に沈んでしまうのだ。

トイレから、赤い目をして戻ってきた僕を、坂本はすこし心配したようだった。しかし、それを指摘することが野暮だということのわかる坂本は、話題を変えてくれた。

それからは「ゆとり世代」の常識のなさを嘆くばかりの会になった。坂本はしかし「ゆとり世代」に対して、それほど悪い感情を持っていないようだった。それはおそらく、出世することをあきらめた坂本にとって、うちの会社はそれほど居心地のよいものではないからだろう。そうした地位にいれば「ゆとり世代」ではなくて、うちの会社のほうが、自分のことを評価してくれない悪者に見えるのかもしれない。

僕も、その悪者の一味なのかもしれない。

ス

トリー4

必要のない知識

次の日、友松を連れて、総務部にいる同期の柏信彦に会いに行った。実のところ、柏のことは、顔も名前も忘れていた。昇進祝いの花見にも来ていなかったのも、柏と会うのは、もう5年ぶりぐらいになるかもしれない。こうして同期との縁を取り戻せたわけだから、友松にも、すこし感謝しないとイケない。

柏には、僕のところにいる「ゆとり世代」の教育の一環として、「総務部がどういう仕事をしているのか教えてあげてほしい。そこで、うちの会社が自社ビルを購入しない理由といった、僕たちの普段の仕事からは見えない話をしてもらいたい」という、そんなメールを出した。

柏はそれに対して、僕の昇進祝いの席に出られなかったことを詫^わび、その上で、喜んで時間を割いてくれた。同期がいなければ、僕はやっていけないと、あらためてその存在に感謝した。

「まず、最近はこの企業も自社ビルを売却しているということ、ご存じですか？」

一通りのあいさつが終わったあと、柏は、丁寧な口調で話を切り出した。柏は、会社の規律をつくる管理部門にいただけあって、同期ではあっても、こうした場でなれなれしい態度はすこしも見せない。そしてどうやら、自社ビルというテーマには、すこし自信があるらしい。

なによりも僕がホツとしたのは、友松がしつかりと柏にあいさつができたことだ。社内とはいえ、ちゃんと名刺を渡し（その渡し方には問題があったが）、所属と氏名を名乗り、時間を割いてくれたことに礼を述べることができた。「ゆとり世代」なりに、内と外を分けることができるようだ。

僕も、柏によそよそしいあいさつをして、あくまでも社会人として切り出した。

「知りませんでした。自社ビルを持つということは、会社のブランドにはならないのですか？」

「検討段階というものも多いですが、キリン、シャープ、ソニー、リクルートなど、日本

を代表するような一流企業であっても、現在はのきなみ自社ビルの売却に動いています。過去には、自社ビルを持つているとブランドになりましたし、今でも銀行からの借り入れの担保になるといったメリットもあるにはありますが……」

「どうして、それが今は、自社ビルを持たないという流れなのでしょう？」

友松が、割って入った。まだ柏の話は続きそうだったのに。それでも柏は、たんたんと質問に答えてくれる。柏が、とても頼もしく見えた。こういう総務がいてくれる会社が、どうしてダメになつたりするだろう。それは将来、この会社を支えることになる「ゆとり世代」が、いつまでもダメなままの場合しか、考えられない。僕はうちの会社を愛しているからこそ、「ゆとり世代」を教育しなければならない。

「自社ビルのように、事業の収益に直接貢献しない財産に、管理費や固定資産税などを支払うことを、株主も喜ばないからです。厳密に言うくと、自社ビルを構成する建物と土地ですが、建物は減価償却の対象となりますが、土地は減価償却しないので、そのまま固定資産税がかかり続けるという、結構なやつかいがあるんです」

なんだか話が難しくなってきた。うちの部署の仕事には関係のない話だし、正直、興味もない。僕は、この話が早く終わることを願った。いつしか僕は、仕事のメールを読むふりをして、iPhoneでニュースサイトを徘徊徘徊していた。

「今って、なかなかモノが売れない時代ですよ。その中で、確実にリターンがあるのが、自社ビルの売却なんです。それで、有利子負債を減らしておけば、銀行に支払う利息も減らせます」

とにかく、自社ビルの話は、財務会計上のメリット、デメリットで決まっているということだ。これと、僕がマンションを購入したことには、根本的な違いがある。それは、財務会計的にメリットがあるかどうかではなくて、不動産を欲しいか、欲しくないかという人間の感情が起点になっていることだ。

僕は、妻が喜んでくれるような生活を築きたい。財務会計的な考えで、どこまでも銀行口座を温めておくのではなくて、消費を楽しみたいと思っている。

「でも、なによりも大きいのは、この激変の時代にあつて、不動産を所有することのリスクが無視できないということです。それこそ、大きな災害でもあつて、自社ビルがダメージを受けたら、株主からなんて言われるかわかったものじゃありません。災害保険にもお金がかかりますし、そこにお金をかけるぐらいなら、いつそ有利子負債を減らしておいたほうが健全です。あとは、会社の所在地を変えないといけなくなつたときに、自社ビルだと、そうそう簡単に引越せないということもあります。富士山が噴火して、ビジネスの中心が東京からどこか別の場所に移つたりする可能性もゼロではありませんから」

自社の話なのに、なんだか自分がマンションを購入したことが非難されているような気分になつた。たしかに不動産を取得することにはリスクもある。でも、不動産を持たないことにもリスクがあるはずだ。老後に、ローンの返済が完了した持ち家がないという状態は、まさにリスクじゃないか。

友松は、そんな僕の気持ちに、カツリと亀裂を入れた。

「会社が東京を離れたら、東京に家を買つた人は、結構きついですね」

「そうですね。それは会社としても考えないといけないところだと認識しています。低金利の影響もありますが、そうした背景もあって、うちの会社は、持ち家を購入したいという従業員に低金利でお金を貸すという住宅取得補助の制度を、もう5年前から停止しています」

住宅取得補助が終わっているなんて、知らなかった。僕は、この制度を使って、マンション購入の頭金を確保した記憶がある。今も、毎月の給与から、一定額が会社への返済金として天引きされている。この制度が終わっていることを「ゆとり世代」は、条件の悪い会社に勤めていると感じるのだろうか。それとも、違った見方をするのか、興味がわいた。そして友松は、違った見方をした。

「すこし安心しました。将来がどうなるかわからないこの時代に、固定資産を増やそうとするのではなく、将来に柔軟に対応しようとしているこの会社の考え方がわかった気がします」

友松は、それから財務会計的な質問を柏に投げかけていた。柏は、しつかりとした知識

で、その質問に対して答えていた。僕にはよくわからない用語を、友松が知っていることには驚かされた。ただそれらは、うちの部署の人間には「必要のない知識」だ。友松は、財務会計に興味があるようだから、そちらへの異動を考えてあげたほうがよいのかもしれない。

僕の不動産のことは、もう買ってしまったわけだから、いまさら考えてもしかたがない。そんなことを思っていたとき、昨晚の坂本の質問が、すこし違った形でよみがえってきた。

「水島はさ、もう一度マンションを購入する前の自分に戻れたとして、それで、今のマンションを買うかな？」

柏の説明に対して、子供のように喜んで質問を返す友松のはずんだ声が、すこし頼もしく聞こえた。僕は「必要のない知識」というものがなんであるのか、すこしわからなくなってきた。いや、そうではない。僕は「必要な知識」を持っているからこそ、同期の誰よりも早く補欠を抜け出して、マネジメントの打席に立つことができているのだ。だから、僕が知らないことは、うちの部署では「必要のない知識」のほずだ。

この猿山にずっといるかぎり、僕は「必要な知識」を持っている。でも坂本のように、

この猿山では上に行けない多くの従業員は、「必要な知識」とはなんなのかがわかっていないはずだ。そしてこの子たちにもまだ、それがわからないだろう。

でも、この猿山が消えてなくなってしまうたら？ もし、僕が早期退職制度のターゲットトになり、この猿山を出なければならなくなったら？ そんなことは、僕は前提としていない。まさか、そんなことは起こらない。坂本は危ないかもしれないが、僕はもつと安全な場所にいる。

いつのまにか、友松は柏の説明に満足させられていた。僕は「必要な知識」という、よくわからないテーマの周りでグルグルしていた。そのため、話の終わりにまったく気づかず、友松が柏にお礼を述べたあとになって、友松から声をかけられるような状態だった。僕も、柏に再度お礼を述べて、いつもの仕事に戻った。この日、友松は、いつもよりもすこしだけ素直に仕事の指示に従ってくれた。

その夜、柏から1本のメールが届いた。

差出人・柏信彦

件名・友松さんの件

水島課長

おつかれ様です。総務部の柏です。

本日は、お忙しいところ、お会いできて光栄でした。

友松さんは、いわゆる「ゆとり世代」らしく、

ネットですぐのことを学ばれているようですね。

日常業務とは関係のない財務会計の知識も、それなりにあるようです。そこはとても感心しました。

しかし友松さんは、ネットで目立つ、優秀な方々の影響を

受けすぎているようにも見えました。

厳しく言うなら、そうした方々のご意見を鵜呑みにしています。

友松さんは、まだ、他人の意見を、

自分で判断できるだけの経験がありませんから、

しかたがないのかもしれませんが。

的外れなことを言っているかもしれません。
その場合は、ご容赦ください。

柏信彦

追伸…今度ぜひ、飲みにも行きましょう！

知識が成功にとって重要であることは疑えない。そして知識には「必要な知識」と「必要のない知識」がある。とはいえ、僕は、本当に「必要な知識」を持っているのだろうか。そして「必要な知識」とはなんだろう。

僕も、そして柏も、ネットで騒がれているような、飛び抜けて優秀な人のように成功していない。僕ぐらいの年齢になっていけば、僕の10倍は稼いでいる人もいるだろう。そういう人こそ、「必要な知識」とはなんであるか、語るのにふさわしいのではないか？

今日、柏の話を書かないで読んでいたニュースによれば、日本で年収2500万円を超える人は、たったの0・2%しかないのだという。逆に言えば、そうした恵まれた人も

0・2%は確実にいるわけだ。残りの99・8%は「必要のない知識」がなんであるか、判断できていない人々であり、僕は、そちら側の人間にすぎないのかもしれない。

友松には、財務会計の知識がある。それは本当に「必要のない知識」なのだろうか。ネットの有名人によるアドバイスは、間違っているという理解でよいのだろうか。

不思議なもので、柏からのメールにあらためて「ゆとり世代」と書かれると、僕たちの世代は、「ゆとり世代」という言葉によつて、とんでもない思考停止におちいつているような気がしてくる。友松の意見にも、どこか正しいところがあるのではないか。

「ボクが仕事できないのは、どう考えても水島さんが悪いからです」

僕がもし、0・2%に入っていれば、友松に「必要な知識」を示してやることができるかもしれない。いや、友松はすでに、ネットから「必要な知識」がなんであるかを自分なりに理解しているのだろう。それで、財務会計の勉強をしている。僕には、上から目線で「ゆとり世代」に説教ができるだけの正当性はあるのだろうか。

友松は、僕が知っている「同期の中ですこしだけ先にいく方法」を求めているのではないのかもしれない。まして「同期の中で遅れて出世する方法」など、迷惑なだけだろう。

友松が、広い世界で勝負したいと思っっているとするとするならば、僕に教えてやれることはあるのだろうか。「ゆとり世代」が、そうした世界を見ているとするとするならば、99・8%の側にいる上司や先輩に、いったいなにが言えるのだろうか。

僕は、自分の専門分野と言える業界のキーワードを入力し、Google検索を試してみた。そこでいくつかのブログを見つけ、しばらく、そうしたブログを徘徊した。間違った記述もあったが、非常に勉強になる。時計も23時をまわろうとするころ、僕は、うちの会社が事業を行っている業界の動向に詳しいブログを見つけた。そのブログの4月1日の記事は『新卒の君に向けたメッセージ』というものだった。

記事には、この業界の未来がかなり厳しいものであることが書かれていた。そして財務会計、IT、英語力は、そうした時代を生き抜いていくための必要条件であり、具体的な勉強方法が整理されていた。そして記事は、次のような文章で締められていた。

財務会計、IT、英語力の重要性は、ずっと昔から指摘されてきました。あまり強いことは言いたくないのですが、こうした、最低条件にすぎないスキルすら学習できていない上司や先輩には注意してください。

彼らは、いろいろなアドバイスをしてくれるでしょう。ですが、そもそも彼らは、誰かにアドバイスできるような状態にはありません。だって、自らの将来にさえ、準備ができていないのですから。

そうした人々と飲みに行く時間があれば、しっかりと基礎固めをしてください。経験では先輩社員には勝てなくとも、知識ならきつと勝てます。知識をばかにしないでください。知識をばかにする人は、必ず、知識に泣くことになります。

決まって定時退社する友松は、おそらく、どこかで勉強をしているのだろう。もしかしたら、綱島に、社会人向けの塾のようなものがあるのかもしれない。

友松が財務会計の知識を身につけている理由は、友松が、それをビジネスの基礎だと考えているからだ。すでにITでは、ちょっとしたトラブルがあると、うちの部署で最も頼りになるのが友松だ。その点だけは他の部下も友松を買っていた。

袖机から、友松のプロフィールシートを取り出し確認すると、「TOEIC840点」とメモしてあった。これは、僕自身の点数よりも高く、部署内で一番高い点数でもあった。そういえば、僕はここのところずっと英語の勉強をさぼっている。

うちの部署の仕事には、財務会計の知識は必要ない。ITの知識は、メールが使えるぐらいで十分だ。それに、英語力も必要ない。だから、僕の部署の連中は、おそらく誰も、こうした勉強はしていない。しかし、このままでずっと生きていけるのだろうか。

僕たちが無為に時間を浪費しているころ、友松は、ネットの向こう側からやってくるアドバイスに従って、コツコツと勉強をしている。そうしたことを知らずに、僕たちは、友松の無礼な側面だけを見て「ゆとり世代」だとあきらめている。真相は、そんなところにある。

もちろん、財務会計、IT、英語力があればいいかというと、そこには疑問もある。ただ、同時に、自分は0・2%の側にはいないわけで、そうした疑問を持つている暇があれば、素直に成功者に従ってみるということも必要なのではないか。疑問を深掘りするのには、そのあとにしたほうが建設的なのではないだろうか。

ス

ストーリー5

異動

友松は、柏との面会のあと、素直に僕の指示に従うようになった。

もしかしたら、過去のクレームが効いて、人事からもなにか言われたのかもしれない。いや、どこかのブログ記事に「ダメな上司との付き合い方」みたいなものがあった、そのアドバイスに従っているだけなのかもしれない。

冬になるころ、友松は、自分の席でヒマにしているとき、業界紙を熱心に読むようになっていた。財務会計、IT、英語の知識は、すでに習得したという意味か。その上で、この業界についての知識を身につけようとしている。

ある日、別の部下と友松が口論になった。友松が、その部下の専門知識のなさを指摘したことが原因だった。たしかに友松は、業界紙に掲載されていそうなことは、よく理解できようになっていた。とはいえ、経験のない友松は、業界紙の内容がそのままうちの会社にも適用できると考えており、その危うさが目立つ。業界紙の記者にも、いい加減な連中はたくさんいて、嘘を書くことも少なくない。これは、なんとかしないといけない。

この口論があつてから、毎週水曜日の朝に、部署の全員を集めて勉強会をすることにした。テーマを決めて、部下がそれぞれ持ちまわりで講師を担当する。講師の間違いや、自社の状況については、僕がそれを指摘するという形だ。

結局のところ、喜んで勉強会に参加するのも、飲み込みが早いのも、友松だった。友松以外の部下がつくる資料が国内事例ばかりなのに対して、英語のできる友松がつくる資料には海外事例がふんだんに含まれていた。正直、僕も友松の資料から勉強させてもらった。英語が必要ないというのは、英語を使えない人間が言うことだ。英語が使えると、世界が広がる。これは動かせない事実として、僕の中に強く残った。

友松はあいかわらず無礼で、コピーを頼むとそれを断り、飲み会に誘っても参加することとはなかった。それでも、友松のことを「ゆとり世代」だとバカにする部下はもういない。変わり者だが、見込みのある奴ということで、評価は固まっていた。

最近になって、友松のことを、常務が個人的に可愛がっているという噂を聞いた。常務のところを表敬訪問した外国人が、訪問を終え、帰りのエレベーターホールで常務と別れのあいさつをしているところに、友松が英語で割って入ったそうだ。別の噂では、常務が友松を外国人との飲み会に誘い、友松はそこで手品を披露し、大いに場を盛り上げたとのことだった。友松からはなんの報告も受けていなかったもので、こうしたことは噂で知るし

かなかったのだが。

友松は、常務からの命令には、一切背かないだろう。常務は、0・2%の側にいる人材であり、友松もそれをよく理解しているだろうから。そして常務は、友松が優秀であることを見抜いているのだろう。

それからしばらくして、友松は海外部に異動となった。こうしたウエットなことで人事が決まるのは、残念ながらよくあることだ。ただし、そうした抜け道のような人事に頼っているのは、長期的には勝てないと思う。友松は優秀だと思うが、この点だけは、やはり心配だった。人を評価するのは、また人であるという事実を無視してしまうのが、優秀なのに失敗する人材に共通することでもある。要するに、いくら人事制度上で高い点数がつけられていたとしても、特定の人材の処遇を最終的に判断するのは、権力者という感情を持った人間なのだ。

送別会を開いても、友松はおそらく来ないということで、部署での送別会は企画されなかった。友松がいなくなり、ちょっとしたITのトラブルも解決できない人材だけが、僕の部署に残された。勉強会もいつしか解散となり、僕の部署は、友松が配属されてくる前の状態に戻った。そこに残されたのは、ただ、大きな不安だった。当然、友松がいなくなっても、部署の業績は回復しなかった。

友松が異動となつて以来、僕は、繰り返し同じ夢を見るようになった。

見知らぬ、どこかヨーロッパの漁港。僕は、大きな船の甲板に、他の乗組員と一緒にいる。夕暮れ時のようで、乗組員はみんな、明日の準備で忙しそうだ。

夕焼けに染まっているように見えた港町は、いつしか、大火事になっている。夕焼けのように見えたのは、大火事の火であつた。遠くにある教会の尖塔せんとうが、まるで、ろうそくのような炎をふいている。

僕は、大火事から逃れようとする人々に、こつちに来て船に乗れと叫ぼうとする。でも、なぜか声が出せない。他の乗組員は、この大火事に気がついていない様子で、明日の準備に追われている。僕は、なんとか他の乗組員に知らせようと、彼らの腕をつかもうとするが、つかめない。

船とは反対方向に逃げていく人々の群れが見える。そつちは、ダメだ！ 火の海になっている、大火事の中心地だ！ それでも、声が出ない。頬に熱を感じるばかりで、誰一人助けることができない僕は、泣いている。

涙を袖でぬぐい、ぼやけた目で僕はまた港町のほうを見た。すると、どういふわけか大火事はなくなっている。夕焼けで金色に染まった、いつもの港町。ああ、

大火事に見えたのは、僕の勘違いだった。

港町にいる人々が、遠くから、船の上にいる僕を見ている。その顔は、怒りに満ちていた。やはり、みんなは助からなかったのかもしれないと不安になる。

たしかに僕は、せいっぱい叫ぼうとした。僕は、港町の人々を助けようとした。ただ、声が出なかったのだ。そう弁解しようとした次の瞬間、船がすごい勢いで港を離れはじめた。さっきまで見えていた、港町の人々の顔が、大きな金色の中に溶けていく。

船はそのまま、怖いぐらいに加速していく。状況を確認しようとして、他の乗組員を探そうとするが、僕以外、この船には誰も乗っていない。それでも、船は加速していく。

ス トリー 6 病気

健康診断の結果、はじめて「再検査」ということになった。これまで病気とは無縁の生活をしてきたので、かなり驚かされた。そろそろ無理のきかない年齢ということなのだろう。そういえば、このところ食欲がなかった。

検査入院が必要とすることで、1週間ほど会社を休むことになった。自分が1週間も休めば、案件の多くが頓挫するだろう。これは上司にも部下にも、いかに課長である自分が必要な存在かをアピールするチャンスにもなる。

いや、そうだろうか。案外、課長である自分がいなくても、なんとかなるのかもしれない。そういえば昔、僕がまだ新人だったころ、やはり課長が病気で入院したことがあった。結果として、ハンコを押してくれる人が一人減ったことで、かえって仕事がかどった記憶がある。あのときの課長と、今の僕が違うと、どうして言えるだろう。

疲れていたのだと思う。いや、ずっと疲れているし、どこか日々を生きる中で、なにか「より大きくて大事なもの」から、ずっと隔絶されているような気がしていた。その「よ

り大きくて大事なもの」がなんであるか、僕はなんとなく、わかつていたように思う。

検査入院の結果、僕は、初期の大腸ガンであることがわかった。初期とはいえ、まさか自分がガンになるとは思っていなかった。ガンを告知されて、僕はまず、そんなことはありえないと医者に食ってかかった。それから、なんでこんな大切な時期にと、怒りがわいてきた。同時に、激しく動揺した。なぜ、自分がガンになるんだと。そしてやっと僕は、自分が死ぬかもしれないということ、すこしだけ覚悟することができた。

大腸ガンは、発見が初期であれば完治しやすいという、ガンの中でも比較的、助かりやすいものだったことも幸いした。結果として手術は成功したものの、それでも術後に吐き気が止まらなくなってしまう、そこからしばらく入院生活が続くことになった。

家族が見舞いに来ているときは、すぐにもとの健康な状態に戻れるという確信が得られた。それでも家族が帰ってしまうと、僕は決まってベッドで泣いた。中学時代からの悪友たちが来てくれたときも、僕は自分でも不思議なくらい快活になった。彼らが置いていつてくれた中学時代の自分たちの写真を見つめては、楽しかった昔からこんなにも遠くに来てしまった現在の自分の立場を思い、また泣いた。

会社の同僚は、ほとんど見舞いには来なかった。みんな、忙しいのだから、当然だ。頭

ではそう思っただけでも、僕は、そんな同僚に対して敵意をふくらませた。職場に復帰したら、見舞いに来なかつた連中を後悔させてやる。そんなふうと考えているときも、僕はやはり泣いていた。

このころの僕は、誰かを憎んでいないと、自分の気力も維持できないような状態だった。

「水島はさ、もう一度就職活動中の大学生に戻れたとして、それで、うちの会社への入社を希望するかな？ 他の会社じゃなくて、本当にうちに入社するかな？」

「どうだろうか。わからない。」

「ボクが仕事できないのは、どう考えても水島さんが悪いからです」

「そうかもしれない。いや、そうだったのだと今は思う。」

入院して1カ月が経とうとするとき、柏が病室を訪ねてきた。仲間だと思っていた同期の中で、ここに来たのは、後にも先にも、このときの柏だけだった。

柏からは、復帰しても、以前と同じ仕事は厳しいということを告げられた。基本的な職場復帰プログラムをこなしたあと、僕は、人事課で採用を担当することになるということだった。もう一度就職活動中の大学生に戻れたとしても選ばないかもしれない。「この会社」で、僕が採用を担当することになるとは、なんとも皮肉な話だ。

柏はさらに、僕のところから海外部に異動となった友松が、「ゆとり世代」らしい理由で退職するという話をした。理由は、申請しても有給休暇が許可されないからとのことだった。友松らしくて、思わず笑ってしまった。

一度は近づけたと思ったが、やはり「ゆとり世代」とはわかり合えそうもない。いや、そもそも自分には、いかなる他者をも理解できないのかもしれない。僕のほうが、誰か他者よりも正しい道を進んでいるかどうかすらわからない。とはいえ、友松はやはり、あまりにもこの社会の力学がわかっていないように思える。友松のことが、気になる。

柏とは、いかに「ゆとり世代」がダメかという表面的な話で盛り上がり、僕はまた少し元気になった。

その後、僕の体調は回復し、気力も充実してきた。今や、ガンは治る病気なのだと思つた。こうして一度は出世コースから外れてしまったが、採用活動を通して、また「この会社」に貢献したいという気持ちになれた。病気でキャリアが中断しても、そこからでも上

「おう、おまえ、会社辞めたんだって？」

「うん。だって、残業が多いから」

うん、じゃないだろう。さすがに！ それでも、こうして若い世代と話していると、不思議と嬉しい気持ちになる。友松はもう、「あの会社」の社員ではないのだ。僕は今、そこらへんの若者と会話しているのだと割り切るしかない。いや、そこらへんの若者ではなく、僕は、友松のことを年齢の離れた友達のように感じたいのかもしれない。

それにしても、これから、友松はどうやって生きていくのだろうか。そしてなぜ、見舞いに来てくれたのだろうか。まさか、友松にとって、僕は友達にしたい人間ではあるまい。

「残業が多いと、綱島に行けないもんな」

「えっ、水島さん、ボクが綱島に通ってるの、知ってたんですか？」

「そりゃあ、上司だからな。部下の行動は、可能な範囲で把握しているよ。あつ、元上司

と元部下だな。あれか？ 綱島では、英語とか勉強してるのか？」

「いえいえ、あそこにはボクの尊敬する人がやってているNPOがあるんです。そこでボク、震災の復興支援活動のお手伝いをさせてもらってます。あの会社みたいに、アホみたいに残業させられるところにいたら、ちよつとした支援活動もできません。マジでむかつきますよ。あの連中は、勝手に残業すればいい。それでリストラされて、住宅ローン返せなくなつて、死ねつて感じですよ。あつ、水島さんのことじゃないですよ」

自分の住宅ローンを返済するために喜んで残業をこなしていた僕は、もはや、「あの会社」の社員ではない友松に、どのように接するべきかよくわからない。そうだ、僕は深夜残業をカウントして、毎月どれくらいの手取りになるかを計算するのが楽しみだった。僕は、そうした自分自身を振り返りつつ、ベッドサイドに飾られた花のほうを向いて、しばらく黙っていた。そこには、紫色のスイートピーがあった。

友松のほうが、沈黙に耐えかねたのか、すこし丁寧な口調に戻して、また話をはじめた。

「水島さん、被災地に行つたことありますか？」

「いや、残念ながらないよ。寄付はすこししたけど」

「えっ、それでいいんですか？」

日本に生まれ、日本人として育ち、同胞が震災で困っている。この瞬間も、被災地で苦しみに耐えている人がいる。それなのに、僕はそれをあえて考えないことにしてきた。

困っている人の助けになりたい。そう思って、僕は、「あの会社」に入社したのだ。でも今は、住宅ローンのことが心配で、家族はおろか、自分自身のことさえ、ちゃんと守れる自信がない。

そんな僕が、見舞いに来ない同僚のことを恨んでいる。その恨みを晴らすことを目標に、また「あの会社」に戻ろうとしている。そこでまた、ただ猿山の頂上を目指そうとしている。本当に、それで、いいのだろうか。いや、それも重要なことだ。問題は、それ「だけ」でいいのだろうかということだ。

「よくない。よくないよ。友松、俺を被災地に連れていってくれないか？ 邪魔にならな

いところで、でもなにか手伝えることがあれば、嬉しいんだけど」

「ですよ。ああしたことがあって、被災地のことを気にかけていないというのは、人としてありえないと思います」

世界には、震災以外にも様々な問題がある。だから、友松があの震災のことだけで、人間の善しあしを判断しようとしていることには、疑問を感じた。とはいえ、まさか、友松から「人として」なんていう言葉が出てくるとは思わなかった。僕はこのとき、すこしだけあの夢の意味がわかった気がした。

僕は、よい会社員だったかもしれないが、よい人間とはとても言えない日々を過ごしてきた。あの夢は、それを警告していたのかもしれない。

僕は、退院後すぐには復職せず、療養としてさらに1週間の休暇をもらうことにした。そして、もはや「あの会社」とは関係のない友松に、被災地の案内をお願いした。

友松が病室を訪ねてくれた日の夜、僕はまたあの夢を見た。しかしこのときは、いつもとはすこしだけ、夢の内容が違っていた。

見知らぬ、どこかヨーロッパの漁港。僕は、大きな船の甲板に、他の乗組員と一緒にいる。夕暮れ時のようで、乗組員はみんな、明日の準備で忙しそうだ。

夕焼けに染まっているように見えた港町は、いつしか、大火事になっている。夕焼けのように見えたのは、大火事の火であった。遠くにある教会の尖塔が、まるで、ろうそくのような炎をふいている。

僕は、大火事から逃れようとする人々に、こっちに来て船に乗れと叫ぼうとする。でも、なぜか声が出せない。他の乗組員は、この大火事に気がついていない様子で、明日の準備に追われている。僕は、なんとか他の乗組員に知らせようとして、彼らの腕をつかもうとするが、つかめない。

船とは反対方向に逃げていく人々の群れが見える。そっちは、ダメだ！ 火の海になっている、大火事の中心地だ！ それでも、声が出ない。頬に熱を感じるばかりで、誰一人助けることができない僕は、泣いている。

涙を袖でぬぐい、ぼやけた目で僕はまた港町のほうを見た。すると、どういかわけか大火事はなくなっている。夕焼けで金色に染まった、いつもの港町。ああ、大火事に見えたのは、僕の勘違いだった。

港町にいる人々が、遠くから、船の上にいる僕を見ている。その顔は、怒りに

満ちていた。その人々の中には、中学時代からの悪友や、友松の姿もあった。そしてそこには、僕の家族もいた。大好きだった祖父の姿も、そこにあった。

たしかに僕は、せいっぱい叫ぼうとした。僕は、港町の人々を助けようとした。ただ、声が出なかつたのだ。そう弁解しようとした次の瞬間、船がすごい勢いで港を離れはじめた。さつきまで見えていた、港町の人々の顔が、大きな金色の中に溶けていく。

船はそのまま、怖いぐらいに加速していく。状況を確認しようとして、他の乗組員を探そうとするが、僕以外、この船には誰も乗っていない。それでも、船は加速していく。しかし僕は、この船の向かう先に、興味を失っていた。

そうして僕は、黒い「水あめ」のように波打つ海に飛び込んだ。海水が僕の体にベタベタとまとわりつき、うまく泳げない。徐々に、僕の体は「水あめ」の中に沈んでいく。でも、不思議と、不安はない。僕はそのまま、どうやら海の底にいる。

ス

ストーリー7

被災地

東北新幹線の一ノ関駅で、友松と待ち合わせた。そこから大船渡線に乗り換えて、気仙沼に向かう。途中、車窓から見た景色は、はじめて見る景色だったにもかかわらず、懐かしさを感じた。素朴で、飾らない、身の丈に合った生活が車窓から見えた。

気仙沼の駅からは、友松の運転でレンタカーを走らせ、まだ復興とは程遠い気仙沼と、陸前高田を見てまわった。友松の説明を聞きながら、僕はだんだん無口になっていった。ここで、たくさんの方々が亡くなった。その事実を受け止めた上で、たくさんの方々が今を真剣に生きている。被災地に、猿山はなかった。

気仙沼の唐桑という漁村で、牡蠣かきの養殖を見学した。牡蠣のカラをむく作業場では、むいたばかりでまだ海水を含んだ牡蠣を食べさせてもらった。塩辛くて、牡蠣そのものの味はよくわからなかった。しかし僕は、自分が海そのものを食べたような気持ちになった。

作業場の隣にあったトイレを借りた。トイレで用を足しながら、僕は、自分の体から出ていく水分を観察していた。この水分は、僕の体の一部だった。いったいどの瞬間から、

それは僕の体ではなくなるのだろう。僕の体の一部だった水分は、こうして気仙沼になっていく。この水分はやがて海となり、そこでプランクトンをはぐくみ、牡蠣になる。その牡蠣はまた、誰かの体になるのだ。

国の特別天然記念物に指定されている、ニホンカモシカを見ることもできた。道路脇の切り株に、夫婦だろうか、2頭仲よくとまり、ジツとこちらの様子をうかがっていた。僕が自然を見ると、自然も僕のほうを見ている。あたりまえのことだが、僕はずいぶん長いこと、自然を見てこなかったように思う。

結局、僕は被災地を見てまわっただけで、被災者の方々には、なんの助けにもならなかった。なんのことはない、ただの観光旅行だった。だが、僕のほうは、被災地によって助けられた。黒い「水あめ」の底に沈んでしまった僕の体は、このとき、港町に引き上げられた。そう感じた。

被災地が今、どういう状況なのかは、「あの会社」の従業員にとって「必要のない知識」なのだろう。だが、それで人間と言えるのだろうか。猿山の猿にとっては、必要のない知識かもしれない。でもそれは、人間として知っておくべきことだ。

「ボクが仕事できないのは、どう考えても水島さんが悪いからです」

僕にとって、仕事とはいったいなんだろう。そして、友松にとってそれはなんだろう。友松の答えが正しいかどうかはわからない。疑問もある。が、どうやら、僕のそれは、正しくなさそうだ。

ス

ストーリー 8

それから

職場に復帰して、数カ月が過ぎた。採用担当者としての仕事にも慣れ、つねに「死」の不安はあるものの、体調はすっかりよくなった。

採用の仕事では、日々、多数の人々の人生に触れることができた。新卒も中途も、1名の枠に、数十名もの人が応募してくる。しかし採用とは、候補者の人生を吟味しながらも、候補者を落とす仕事だった。常に心苦しさとともにあり、楽な仕事ではなかった。

同時に、採用経験を通して、もし今の自分が転職活動しても、相当に苦労するという現実が理解できた。病気から復帰してくる人材を、まず採用担当者として配置するのは、「この会社」の配慮なのかもしれない。さすがに、よく考えられているものだ。

定期検査の結果は、良好だった。柏からは、経営層が僕の回復状態を聞いて、もとの部署に戻す検討をしているという情報をもたらしていた。

もちろん、課長というポジションではない。そこはもう、別の人材によって埋められている。それでも僕は、もといた部署で仕事をするほうが活躍できるのは明らかだったし、

採用担当者として残りの人生を歩んでいくことは、僕には向いていないことだと感じていた。そして僕は、次の人事異動で、もとの部署に戻ることにした。

妻から、そろそろお見舞いに来てくれた人々を呼んで、快気祝いをしたらどうかと言われた。また桜の季節になったわけだし、もとの仕事にも戻れるし、よい話だ。とはいえ、あからさまに見舞いに来てくれた人だけを呼び出すのも、いかにも見舞いに来なかった人を恨んでいるようで嫌だった。それに今は、恨みのようなものもない。「この会社」に対して、とても静かな感情を持っていた。

柏が快気祝いの幹事を引き受けてくれることになった。このやりとりの中で、昨年の昇進祝いをしきつてくれた坂本が、すでに退職していることを知った。坂本は、「この会社」とはまったく別の業界で活躍している。平社員からの再スタートとのことだった。それも、坂本なりに考えてのことだろう。坂本は見舞いにも来なかったが、なんとなく、そういうものだと納得していた。

坂本の新しい挑戦が、実りの多いものであることを願う。でも、僕は「この会社」で、もうすこし頑張ってみようと思う。別の猿山に転職しても、僕が抱えている問題が解決しないことは明らかかなことに思われたからだ。

快気祝いは、同期や部署の同僚、そして見舞いに来てくれた人々を呼んで、花見ということになった。場所は、昨年と同じ鶴見川の河川敷である。

バーベキューも一段落し、僕はまた、あの橋の上から水面に浮かぶ桜の花びらを見ていた。繰り返すように見える季節も、その何周か目で、楽しめなくなるときが来る。僕の場合それは、昨年のことかもしれないなかった。今年も桜を見ることができた。来年はどうか、わからない。桜を楽しめるといふ、以前ならあたりまえだったことの一つ一つが、なんだけいとおしい。

同僚の一人が、河川敷の橋の下、石の上に放置されていた iPhone を見つけた。そしてそれが誰の持ち物かと、ひと騒動になった。僕にはそれが、昨年、自分が橋の上から投げ捨てた iPhone であることがわかった。昨年の花見のときにうつかりなくしたことにして、僕はその iPhone を受けとった。当然、壊れているものと思った。

「乾燥してるなら、電源を入れましょうよ。もしかしたら、まだ動くかもしれない。水島さん、ガンから完全復活できるぐらい、運がいい人なんだから」

友松が、そんなことを言った。会社を辞めた人間を呼ぶことに、柏は抵抗を見せた。が、

僕がぜひにと友松を呼んだ。とはいえ、この花見にいたのは、ほとんどが「あの会社」の人間だったので、友松にすればいい迷惑だったはずだ。

以前の友松なら、この場でも「あの会社」を批判し、早々に花見の席を立って、なにか別の仕事に向かっただろう。そんな友松も、転職を経験し、別の世界も見て、すこしは大人になった。それはどこか悲しいことではあるけれど、それでも友松の将来を楽しみに思う。いや「ゆとり世代」と揶揄されるすべての若者の将来が、本当に楽しみだ。彼らの多くが、「被災地」を含めて、より広い世界を自分の目で見ておくことを、切に願っている。

友松がカバンからバッテリーチャージャーを取り出し、iPhoneの充電をはじめた。そして電源が入り、パスワードを入力する画面があらわれた。ありえないという気持ちと、自分が「なにかに守られている」という気持ちがふくらむ。

一度は鶴見川の底に沈み、運よく誰かに拾われたものの、風雨にさらされ続けたiPhoneが、今、息を吹き返そうとしている。僕は、パスワードを入力し、そこに昨年の自分の写真を見つけた。その写真の中にある「こいつ」は、猿山のステップを一段上がったことを喜んでいた。

「ゆとり世代」なんていない。「ゆとりのない社会」があるだけだ。

そう思える今、なぜかまた僕は「うちの会社」への愛着を取り戻しつつある。ただ僕は、以前のように、若い世代に嫉妬することなく、彼らと一緒に、まっすぐ頑張っていきたい。このパーベキューで、僕は、どんな笑顔をしているだろう。それは、すこし疲れた笑顔かもしれない。

でもそれは、人間の笑顔だ。